

説明活動における事前プランニング過程の検討

辻 義人

(小樽商科大学 教育開発センター)

口頭による説明を行う際の情報処理について、辻(2008)は、説明場面における情報処理モデルの提案を行っている。説明場面における情報処理モデルは、主に対話場면을想定している。説明者は、聞き手の状況(目的やスキル、置かれた状態など)を把握し、それに合わせた説明活動を行うとされている。

しかし、現実的な説明場면을考慮したとき、説明者が聞き手の状況を十分に把握しているとは限らない。限定的な情報に基づき、説明を行う場面も考えられる。本研究では、説明者による事前のプランニング過程に注目し、その探索的検討を実施する。

ここで、説明技能を規定する要因として、メタ認知能力に注目する。説明活動に関するメタ認知能力として、崎濱(2003)は、文章産出に関する尺度を提案した。研究Ⅰでは、崎濱による尺度に基づき、口頭説明に関するメタ認知尺度の作成を試みる。研究Ⅱでは、説明課題の質と、メタ認知能力の高低間における、プランニングの違いの検討を行う。

【 研究Ⅰ 】

目的：説明技能を規定する要因として、メタ認知能力の関連が予想される。ここで、崎濱(2003)による文章産出に関するメタ認知尺度に基づき、口頭説明場面におけるメタ認知尺度の検討を行う。

方法：文章産出メタ認知尺度(崎濱, 2003)に基づき、口頭説明に関するメタ認知尺度の作成を行った。調査は2009年2月に実施した。学部生を対象とした200名程度の授業の受講者を対象とし、調査票の配布・回収を行った。その結果、110件の回答が得られた。

結果と考察：得られたデータについて、探索的因子分析(主因子法、プロマックス解)を実施した。その結果、3因子が抽出された。それぞれ、F1:伝わりやすさ因子(5項目; $\alpha = .738$)、F2:説明の枠組み因子(4項目; $\alpha = .693$)、F3:説明の簡潔さ因子(4項目; $\alpha = .554$)と命名した。全体的に、実用に耐えうる尺度であることが確認された。

【 研究Ⅱ 】

目的：日常場面では、多様な内容の説明が行われている。ここでは、説明課題として宣言的知識(性格心理学)と手続き的知識(エクセル操作)を設定した。これらの課題間における説明プランニングの違いに注目する。また、研究Ⅰで検討を行った説明メタ認知能

力の高低に注目し、説明プランニングの違いについて検討を実施する。

方法：実験は2009年2月に実施した。被験者は大学生15名であった。被験者には、説明内容に関するテキストを読解させ、その説明プランを用紙に記入させた。その際、説明プランを対象に見せるのではなく、自分自身が説明するための資料として作成させた。

結果と考察：説明プランにおける「箇条書き」「イラスト化」「グループ化」表記の生起頻度に注目し、生起頻度の差の検定を行った。その結果、両課題において主効果が確認された($p < .05$)。宣言的知識課題では、説明メタ認知高群のグループ化の生起頻度が高く(図1)($p < .05$)、手続き的知識課題では、説明メタ認知高群において、箇条書きの生起頻度が高いことが示された(図2)($p < .05$)。

【 結論 】

研究Ⅰ・Ⅱを通して、説明プランニングは、説明課題の質(宣言的知識・手続き的知識)と、説明メタ認知能力、これらの影響を受けることが示された。

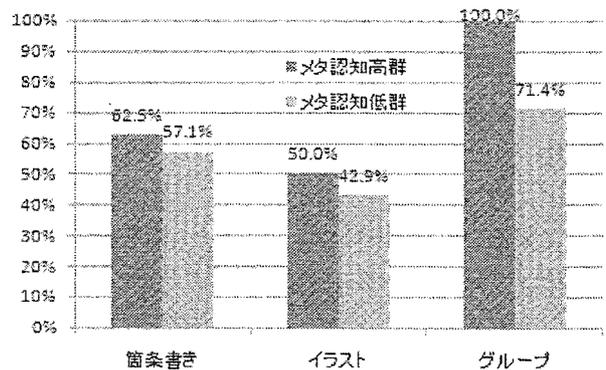


図1 宣言的知識説明課題における表記の生起頻度

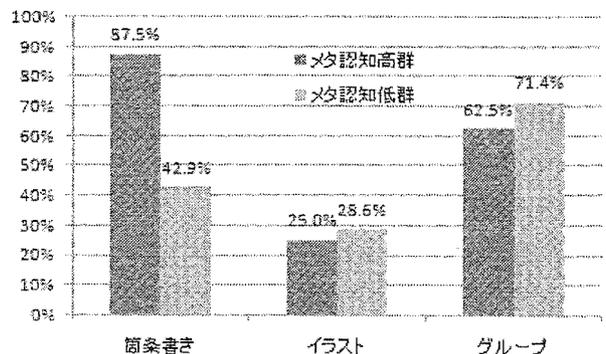


図2 手続き的知識説明課題における表記の生起頻度